ペプシノーゲン検査

ペプシノーゲンは胃粘膜から分泌される物質で、粘膜が委縮した状態になると低下するため、胃粘膜の萎縮度（老化度）をみることができます。萎縮性胃炎になると胃がんになるリスクが非常に高くなるため、主に胃がんのスクリーニング目的で行われます。

X線撮影より早期の胃がんの発見率は約2.7倍も高いとされており、検査コストも約半分に抑えられます。ただし萎縮と関係なく発症する未分化型腺癌や、X線撮影では容易に診断できる進行がんが逆に見逃されることもあります。

基準値

ペプシノーゲンⅠ値が70.1ng/ml以上　または　Ⅰ/Ⅱ比が3.1以上

＊ペプシノーゲンⅡの基準値はⅠの1/3以下が適切ですが、それ単体の数値ではなくⅠ/Ⅱ比で判定します。

ペプシノーゲンⅠ：　主に胃底腺主細胞（胃の下半分や胃底部や胃体部）から分泌

ペプシノーゲンⅡ：　主に胃底線の他噴門線、幽門腺、十二指腸腺など胃全体から分泌

Ⅰ/Ⅱ比：　胃の粘膜の萎縮が進むと、胃底腺が縮小していきます。ペプシノーゲンの基準値には個人差があるため、Ⅰのみではなく Ⅰ/Ⅱ比をみることが大切です。

	±（偽陽性）	+（陽性）	2+（強陽性）
ペプシノーゲンⅠ値	40.0以下	70.0以下	30.0以下
	または	かつ	かつ
Ⅰ/Ⅱ比	2.5以下	3.0以下	2.0以下

＊PPI（プロトンポンプ阻害薬）を服用していると値が上昇します。

・Ⅰ値が高くⅠ/Ⅱ比が低い
　ピロリ菌の感染、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胃がん、ゾリンジャー・エリソン症候群、腎不全、ブルンネル腺腫など

・Ⅰ値、Ⅰ/Ⅱ比ともに低い
　萎縮性胃炎、胃腺腫、胃がん、悪性貧血、肝硬変など

・Ⅰ値が低く、Ⅰ/Ⅱ比が高い
　胃切除後